

隆寛の他力思想をもう少し明確にするために、ここで他力の対照である自力についての隆寛の考え方を整理してみたい。

隆寛は同じ念仏でも自力を励ましてするのは往生することができなと言ふ。他力の念仏は繰り返しになるが他力に帰すことが真実心であり、本願を疑わないから深心であり、往生を求めるために他力にすがるのであるから自ずと三心具足の念仏となるという理論である。隆寛の言ふ自力の念仏とは三心が具足していないので、三心により往生の可否をうまく説明できる。

自力の定義は『自力他力事』によれば身口意の三業を整えて、

念仏スルモノハコノ念仏ノ力ニテ。ヨロツノツミヲノゾキウシナヒテ。極楽へ必
マイルゾト思ヒタル人ヲ自力ノ行トイフナリ

〔続浄〕九、三二頁

とある。このような人はいわゆる辺地往生できるが本土へ往生できないと言ふ。しかし自力疑心の罪を償えば正しく往生できるとする。その理由は、きちんと身口意の三業を整えられような人はほとんどいないからであり、本願を知らないからであると言ふ。

『閑亭後世物語』巻上によれば自力とは本願の名号を称えながら

我身をつくろひ我心を調。戒を持。齋をし。身をせめ心をくだきて。通夜終日に
頭の燃を掃が如に励てこそ。本願にも叶はめと思て。念仏申す

〔続浄〕九、四三頁

ことを言う。また『同書』巻下に、

たとひ本願有とも。我身も悪しく。我心もあしく勤ゆるくては。争仏も迎へ給ふ
べき。偏に我力を励まして申す念仏は自力也

〔同書〕九、四九頁上

とある。さらに、往生できない念仏を四種挙げ、その第一番目に自力の念仏を置き「本願不思議なれば。必ず往生すべし」と思えば他力の念仏となり往生できると言う〔『同書』九、五三頁〕。

これらの文章から、たとえ本願とは言っても自分を励まして心身を整えて念仏しなければ往生できないと考えているのが、共通した自力の定義である。これはすなわち本願を疑うことにほかならないと言う。例えば先の辺地往生について隆寛は「皆是不_三発_三三心_三生_三辺地_三相也」〔『隆全』一、一〇九頁〕と三心を発さないから本土に往生できないとするように、三心

具足を強調している。自力他力と三心の関係が最も明確に現れている文は『具三心義』巻下にある。

正行具^ニ三心^ニ其理必然就^ル雜行^ニ一案^ニ之^ニ自利^ニ真実^ニ中余行^又具^ニ三心^ニ無疑^ニ唯所嫌^ニ
者未^レ發^ニ真実心^ニ時^ニ自力^ニ之行也^ニ深心之中^ニ云^ニ若行^後雜行^回向^得生^ニ此^即指^ニ上^ニ自利^ニ真実^ニ
中余行^也回^向他力^ニ之時^ニ諸行^皆歸^ニ本願^ニ無^ニ不^ニ往生^ニ

〔法然門下の教字〕
附録一五二頁

というように真実心を発さないときを自力の行と言い、諸行を他力に回向したときに往生疑いなしと言うのである。明らかに三心の具足していない行を自力の行と言い、三心具足の行を他力の行と言っているのである。

第十項 まとめ

以上見てきたように、隆寛は三心具足の念仏を本願の念仏と言い、あるいは他力の念仏と言うように往生の正因としての三心を強調するのである。また三福を修している人を本願行^{えいげう}に回入させるために三心が説かれたとして、本願行以外を修している人も三心を発すことで往生できると言うのである。これは隆寛が長い間勉強してきた天台や他の行を土台にして回